

木島 NST 通信 **春号**

発行日：2018年5月発行

担当：NST

編集：栄養グループ

▶ **NST 回診 今年度より START!**

平成28年5月より設立した当院の NST(栄養サポートチーム)ですが、毎週月曜日のミーティングに加え、本年度 3月下旬より NST 介入者を対象に NST 回診を開始しています。

NST 回診ってどんなことをするの??

NST 回診では

- ① 過去の病歴(手術歴)
- ② 入院期間
- ③ 抽出した問題点

など対象者の情報収集

回診で得た情報を元に・・・

NEW NST 回診

<曜日> 毎週水曜日(第2週目除く)

<時間> 13:30~

<メンバー> NST メンバー(医師・看護師・栄養士 etc)

☆ **問題点を踏まえた今後の対処方法**

☆ **栄養管理の方針** etc...

を提案!

一例だけ回診内容 をご紹介します☆

身体の拘縮により胃が
圧迫!?

→嘔吐 原因の可能性

▼<頻回に嘔吐をする患者>の回診を行いました。

▼<これまでの経過>

食事は車椅子で摂取される場合、ギャジアップしたベッド上で摂取される場合の2パターンあるそうですが、いつも食後時間を十分空けてから臥床してもらっているとのこと。

以前より嘔吐されることがあったのですが、最近嘔吐の頻度が増えているそうです。

▼回診では、身体の拘縮が激しく足で胃を圧迫している状態なので、恐らく逆流しているのではという見解でした。

<回診後の対応>

- ① ベッドで摂取する場合、かなり胃を圧迫する姿勢となるため、「**必ず車椅子で食事をしてもらう**」
- ② 胃に食物が溜まらない(胃から十二指腸への排出を早める)よう「**臥床はできるだけ右向きとする**」

ことを提案しました。

このような、NST 介入者で気になる方はお気軽に NST までご相談ください!

週刊 医学会新聞で低ナトリウム血症について紹介されました

慢性低ナトリウム血症への積極的介入を 第21回日本病態栄養学会の話題から

第21回日本病態栄養学会年次学術集会が1月12～14日、山田祐一郎会長（秋田大）のもと国立京都国際会館（京都市）において開催された。本紙では、榎村益久氏（藤田保衛大）による教育講演「電解質と栄養管理——低ナトリウム血症とQOLの低下及び生命予後の悪化との関連について」の要旨を報告する。

◆慢性低Na血症から骨粗鬆症、歩行障害、認知機能障害に
電解質異常で最も頻度が高いのは低ナトリウム（Na）血症である。従来、急性低Na血症の場合は中枢神経症状を呈し重症化すれば死に至るため積極的な介入をするのに対し、慢性低Na血症の場合は治療介入せずに経過観察とされることも多かった。しかし近年になり、無症状あるいは症状が比較的軽度の慢性低Na血症の場合であっても、転倒・骨折やQOL低下、生命予後の悪化につながる事が明らかにされつつある。

榎村氏らの研究グループは、米国50歳以上のデータのクロスセクション解析の結果、軽度低Na血症群では、Na正常群と比べ骨粗鬆症のリスクが有意に高くなることを報告（J Bone Miner Res. 2010 [PMID: 19751154]）。本解析は肥満度・運動度や利尿薬の有無、血清25（OH）D濃度などで補正されており、無症候性と考えられる軽度な低Na血症が骨粗鬆症を引き起こすことが認められた。この論文は引用回数既に260回を超えており、Na代謝と骨粗鬆症との関連を示す研究が進展している。

さらに榎村氏は、SIADH（バソプレシン分泌過剰症）モデルのラットを用いて、慢性低Na血症の歩行・行動への影響を検討。急性/慢性を問わず、低Na血症は中枢神経系に影響しており、歩行障害や認知機能障害につながる可能性が示唆された（J Am Soc Nephrol. 2016 [PMID: 26376860]）。

低Na血症および転倒・骨折・骨粗鬆症といったイベントは、いずれも高齢者において頻度が高い。このことから榎村氏は「超高齢社会を迎える日本においてますます重要な問題となる」と訴え、低Na血症への積極的介入を呼び掛けた。



●山田祐一郎会長

低ナトリウム血症で QOL低下!? 生命予後の悪化!?

第21回日本病態栄養学会での榎村益久氏（藤田保衛大）の教育講演において、慢性低Na血症から骨粗鬆症・歩行障害・認知機能障害が発症しやすいという報告がされました。

電解質異常で最も頻度が高いのは低Na血症です。従来、急性低Na血症の場合は中枢神経症状を呈し、重症化すれば死に至るため積極的な介入をするのに対し、慢性低Na血症の場合は治療介入せずに経過観察とされることも多くありました。しかし、近年になり無症状あるいは症状が比較的軽度の慢性低Na血症の場合であっても、転倒・骨折やQOL低下、生命予後の悪化に繋がる事が明らかにされつつあるようです。

▲2018年2月5日発行 週刊 医学会新聞（第3259号）より抜粋

！ナトリウム付加食、導入開始！

平成30年5月14日より、低ナトリウムが確認された方に対し、ナトリウム付加食の導入を開始します。

（オーダー方法）

- ①電子カルテ「治療形態」を開く
- ②「治療形態」内の「コメント（変更）」を選択
- ③「その他」項目内の5種類から選択

※（のり）佃煮は1食あたり塩分1.5gまで付加可能（昼・夜のみ）

※ 不足分は食塩（小袋）を提供

- ・ 食塩1g ・ 食塩2g
- ・ 佃煮：塩分（0.5g）、塩分（1.0g）
塩分（1.5g）

適度な塩分の摂取を心がけることが大切なのです。

「敵に塩を送る」という言葉をどこかで聞いた事はないですか？
《故事ことわざ辞典》では、「争っている相手が苦しんでいる時に、争いの本質ではない分野については援助を与えることの例えである」と述べています。

～ことわざの由来～
永禄十（1567）年、武田信玄は当時同盟していた駿河の今川氏真との関係を悪化させてしまい、そのことにより氏真は信玄の甲斐国への塩の供給をやめてしまいました。甲斐といえば内陸の国で海が無いので当然塩が採れず、塩は全て駿河湾で採れたものを今川氏から買っていたのでした。塩の供給を止められたことにより、武田家のみならず甲斐や信濃の民までも苦しめられてしまい信玄はほとほと困り果ててしまいました。というのも、塩は人間の生命維持に必要な不可欠なもの。食料の長期保存にも役立つため、これを止められるということは本当に死ねと言われていたようなものだったのです。これを知った、長年信玄と敵対関係にあった上杉謙信が氏真の行いを卑怯とし、甲斐に越後で採れた塩を送ったという言い伝えがあり、これが「敵に塩を送る」の由来となりました。

中国のことわざにも、塩は食肴の将、酒は百薬の長という言葉があります。塩は食物の中で一番肝心なものであり、酒は適度に飲めばどんな薬よりも身体のためになるという意味です。

つまり、日本では減塩を叫ばれていますが、健康のためにはむしろ

栄養コラム

お塩物語